

【東京】医療系大学生&卒業生が「プロに負けない音楽」を目指して-交響楽団はやぶさ副実行委員長らに聞く◆Vol.1

m3.com地域版

2014年、NPO法人「友情の架け橋音楽国際親善協会」が学生たちと共に、若者たちが音楽を通して社会貢献できる場として立ち上げた交響楽団はやぶさ。団員のほとんどが、全国からの医療系大学生および卒業生の社会人で構成されているというユニークなオーケストラだ。創立初期から活躍してきた同楽団実行委員会・副実行委員長の三村英旺氏と渡部眞仁氏に、これまでの活動や今後の展望について話を聞いた。（2021年9月1日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

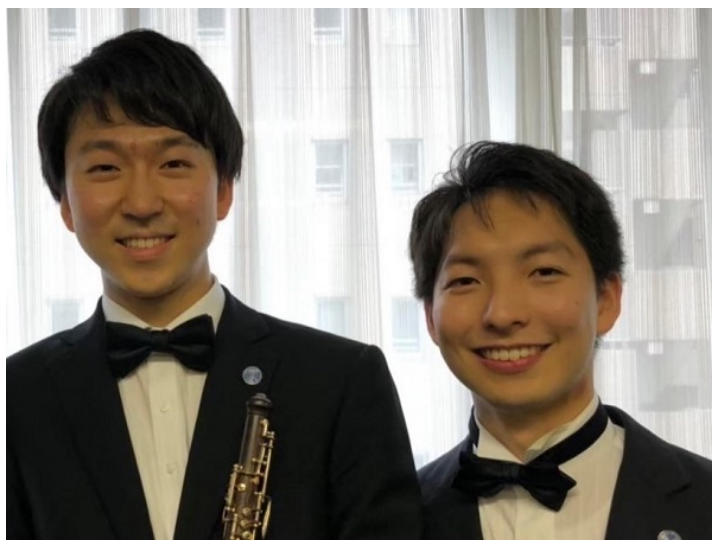
▼第2回は[こちら](#)（近日公開）



指揮者マリウス・ストラヴィンスキーを迎えて

——交響楽団はやぶさはどのように誕生したのですか。

三村 きっかけは、2013年に「友情の架け橋音楽国際親善協会」が主催した音楽イベントです。当時僕は慶応義塾大学医学部のオーケストラに所属し、ヴァイオリンを弾いていて、先輩数人と一緒にそのイベントに参加しました。場所はサントリーホールで、「ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」のコンサートマスター・榎本大進さんのトークを聴いたり、マスタークラスを受けたりしました。その時は、みんなで「楽しかった！」「サントリーホールって、やっぱりいいね」という話で終わったのですが、後日、先輩の一人が「自分もサントリーホールで演奏がしてみたい！」と言って。みんなで考えた結果、主催者の「友情の架け橋」にお願いしてみようということになったんです。それで、「友情の架け橋」に掛け合ったところ、交響楽団はやぶさを立ち上げることになりました。あの音楽イベントがなければ、はやぶさは今、存在していなかったのかもしれない。



渡部眞仁氏（左）、三村英旺氏（右）